

介護ビジネスの未来を創る
週刊高齢者住宅新聞

Elderly Press Newspaper

2023年(令和5年)

8月2日

第724号 (毎週水曜日発行)

(株) 高齢者住宅新聞社

〒104-0061

東京都中央区銀座8-12-15

☎03-3543-6852(編集部)

発行人 網谷敬敏

年間購読料 23,100円(送料込・税込)

ホームページ

https://koureisha-jutaku.com

「利他を徹底し最善尽くす」

インド仏教界トップに随行して

インド仏教界の最高指導者といわれる佐々井秀嶺さんが4年ぶりに来日した。多くのメディアでも取り上げられたことからそのニュースを耳にした人も少なくないだろう。身分制度の思想がいまだに残るインドで、かつヒンズー教が約8割という状況の中、佐々井さんは最下層の民衆に寄り添いその地位向上にも取り組む。そんな同氏の来日時、少なくとも時間を共にしたのが在日僧侶の中田賢一郎氏(さくらライブグループ代表)だ。医療機関、高齢者施設を経営する中田氏は、佐々井秀嶺さんから何を感取ったのか。話を聞いた。



さくらライブグループ 中田賢一郎代表

佐々井秀嶺さんに随行するに至った経緯を教えてください。中田 私は関東圏を中心に全国で約40の医療機関、介護事業所を運営する経営者であり、浄土真宗の僧侶でもあります。そうした背景もあり、バンテージ(インドにおける佐々井氏の敬称)がインド・ナグプールで運営する医療施設に、医療機器や薬剤などを寄付したいという意向を(佐々井氏の活動を支

援する)南大会にお伝えしたのが今年4月のことです。その後、バンテージの来日が決まりましたが、在印からあふらつくことが多く、また日本に来る直前に転倒して頭を打ったことによる痛みがあること聞いていました。そこで来日後すぐの6月2日に、運営する練馬さくら病院にて精査をすることになりました。

日本各地に随行する機会を得ました。中田 依頼されたというよりは、今回随行された小野龍光さんの補助的な仕事を勝手にさせていたのだとい



▲佐々井秀嶺さん(前列右から2人目)

たところ。医師ですし、何かお力になれることがあればと時間の取れる限り一緒にいさせて欲しいとお願ひしました。都合8日間程1日中随行させていただきました。バンテージは自分で自分を鞭打つように3時間の講演が始まるのです。倒れないかこ

わーをコントロールされていくようで、一度入った鞭の効果は夜まで続くよかったです。15回ほど講演を行い、どれも2〜3時間でしたがその間ずっと立ちっぱなし。一度も座らないのです。スライドも原稿もなし。ずっとしゃべり続けるのです。講演の前には取材が入っていることが多く、その取材中もヒートアップしてくると2〜3時間大演説が始まりま



ちらが心配するほどでした。鞭は理念や理想と言い換えることもできます。これは我々も真似をするべきだと思われしました。今は小さな鞭でもいずれ大きくなっていくと思っていま



▲全国各地で講演会を実施

て示唆に富むお話をできごとはありましたが、中田 とにかく、利他を徹底することが大事だと感じました。「自分を捨ててやっていくんだ」とおっしゃってました。自分を捨てて人に尽くす、滅私奉公が医療や介護の根底にある精神だと思います。言うは易いですが、徹底するのは難しいものです。

— 今後の活動に生かすことはありますか
中田 今回の随行でのお話し、破天(山際素男著/光文社新書)に見られるような今までの生きざまを何うと、バンテージは相当に幸運の持ち主だと思われ

「何があっても燃やし続けるんだ」「落ち込むことも辛いこともあるが、過去は変わらなないんだ。俺は前を向いて進むんだ」と常に

「何があっても燃やし続けるんだ」「落ち込むことも辛いこともあるが、過去は変わらなないんだ。俺は前を向いて進むんだ」と常に

インドでは日本での生活が考えられないほど体調を崩すことも多い、誰にでも手を振り、笑い、お話をされます。この親しみやすさは一度でもお会いするとわかります。歴代の首相と常に連絡を取り合ったり、ダライ・ラマと議論しあったりするような方なので、自分を捨ててきてこそ自分らしくいられるのだと感じました。